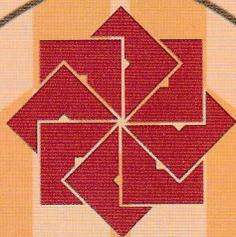


令和七年  
片山定期能 四月公演

—七十五ノ二

令和7月4月13日(日)  
午前11時開演[午前10時30分開場]



(能)卷絹 / 味方梓

(狂言)鬼瓦 / 茂山 あきら

(能)西行桜 / 青木 道喜

(能)葵上 梓之出 / 梅田 嘉宏

ほか

於 / 京都観世会館

片山定期能  
楽会

11:00 能 卷 絹 —まきぎぬ—

シテ/巫女  
ツレ/都の男  
ワキ/勅使  
アイ/従者

笛 左 鴻 泰弘  
小鼓 吉 阪 倫平  
大鼓 河 村 凜太郎  
太鼓 前 川 光範

後見 片 山 伸吾  
大江 信行

味方 梓  
青木真由人  
小林 努  
茂山 虎真

地謡 味方 玄  
分林 道治  
田茂井廣道  
橋本 忠樹  
河村浩太郎  
谷 弘之助  
宮川 卓也  
片山 峻佑

12:10 狂言 鬼 瓦 (大蔵流) —おにがわら—

シテ/大名  
アド/太郎冠者

茂山あきら  
茂山千之丞

後見 茂山 虎真

休憩20分

12:50 能 西行桜 —さいぎょうざくら—

シテ/老桜の精  
ワキ/西行法師  
ワキツレ/花見の人  
ワキツレ/ //  
ワキツレ/ //  
アイ/西行庵の能力

笛 杉 市和  
小鼓 吉 阪 一郎  
大鼓 河 村 大  
太鼓 前 川 光長

後見 武 田 邦弘  
大江 広祐

青木 道喜  
福王 知登  
喜多 雅人  
広谷 和夫  
佐々木 秀  
茂山 茂

地謡 片山九郎右衛門  
古橋 正邦  
味方 玄  
大江 信行  
橋本 忠樹  
河村 和貴  
河村浩太郎  
谷 弘之助

休憩10分

14:30 仕舞 鶉之段 —うかい・うのだん—

シテ/鶉使いの老人

井上 裕久

仕舞 藤 戸

シテ/漁師の霊

片山九郎右衛門

地謡 武 田 邦弘  
橋本 儀道  
古橋 正邦  
大江 広祐

14:45 能 葵 上 梓之出 —あおいのうえ・あずさので—

前シテ/六条御息所の霊  
後シテ/ //  
ツレ/照日の巫女  
ワキ/横川小聖  
ワキツレ/朝臣  
アイ/左大臣家の男

笛 森 田 保美  
小鼓 成 田 達志  
大鼓 石 井 景之  
太鼓 井 上 敬介

後見 青 木 道喜  
味方 梓

梅 田 嘉宏  
浅 井 風矢  
原 大  
原 陸  
増 田 浩紀

地謡 片 山 伸吾  
河 村 博重  
分 林 道治  
田 茂 井 廣道  
河 村 和貴  
宮 川 卓也  
片 山 峻佑  
青 木 真由人

演目解説

勅命により千足の巻絹が熊野権現に納められることとなり、国々から運ばれてくる巻絹を受け取るために、勅使が熊野に派遣される。しかし都からの上納品が未だ届かないでいた。この上納品を携えた男は、慣れない旅に加えて重い荷物を持っているために、不安やら夢中やらで山々を踏み分け、ようやく熊野に着く。まず音無天神に参詣するが、咲き匂う冬梅に目を留め、一首の和歌を心の中で神へ手向ける。それ故に遅れたのであった。勅使は男の遅参を責め縛り上げるが、そこに巫女が現れ、男が遅れた理由を説明して縄を解けという。しかし勅使は、このような男に歌が詠めるわけではないと疑うので、男に上の句を詠ませ、巫女はその下の句をつけ、疑いを晴らす。そして音無の天神が乗り移った巫女はさらに和歌の徳を述べ、神前に祝詞を捧げ、神楽を奏する。そのうちに再び神がかりした様子で物狂いの態となるが、時が経つにつれ神霊は離れ去り、元の姿へと戻るのであった。

狂言 鬼 瓦 上演時間:約20分

訴訟のため、永らく在京した大名は、信仰する因幡堂の薬師に、お礼と暇乞いのため、太郎冠者を伴って出かける。大名は、この薬師を鬼の国許へ勧請したいと思い、御堂の様子を見てまわる。すると破風の上の鬼瓦が目に入る。鬼のいっさい顔をよく見るうちに、その顔が自分の妻の顔に似ていることに気づいた大名は……。

能 西行桜 上演時間:約1時間30分

京都西山にある、西行法師の庵室の桜は今は満開で、都から大勢の見物人がやって来る。西行は今年は桜を独りで楽しもうと思ひ、寺門に花見禁制の旨を人々に告げさせる。ところがはるばる都から訪れた人達をむげに断ることも出来ず、花見を許し、一行を庭へと通す。西行は、俗の花見客は心外だ、これも桜の咎だろうと、『花見んと群れつつ人の来るのみぞあたら桜の咎にはありける』と和歌に詠む。するとその夜の夢に、木陰から桜の精が現れて、先程の歌を詠んだ心を問いただす。そして『桜の咎』とされたことは承服できないと不満を述べ、非情無心の草木の花には何の罪もないことを西行に訴える。その一方では、西行と知りあい、恵みを受けたことはこの上ない喜びだと言ひ、京都の桜の名所を次々と挙げてその美しさを讃え、春の夜を惜しみながら物さびた舞を舞う。やがて夜も明け、桜の精は消え失せ、西行の夢も覚めるのだった。桜の名所として知られながら、遠い故郷があまり訪れる人の少ない大原野。西行法師が庵室として選んだのもそんな理由からだろう。加えてこの曲のシテを「老人の精」としたのも、華やかな桜が咲きつつも閑静な、西山の地のイメージにはまるからかもしれない。

能 葵 上 上演時間:約1時間

光源氏の正妻葵上は、物怪に取り憑かれ寝込んでいた。そこへ朱雀院に仕える臣下に呼ばれた照日の巫女が、梓の法を行ひ、憑き物の正体を暴こうとする。やがて梓の弓の音に引かれて、破れ車に乗った貴婦人が現れる。さめざめと涙を流すその女の名を尋ねると、六条御息所の怨霊と名乗る。御息所は東宮妃として華やかな生活を送っていたが、夫に先立たれた後、親しくなった光源氏との愛も失った今、その愛を奪った葵上を恨んでいるのだった。その恨みは次第に高まり、御息所の霊は葵上の枕元に立ち寄り責め苛み、幽界へ連れ去ろうとするが、執心を残したまま姿を消す。葵上の容体の急変にただならぬ様子を覚えた臣下は、今度は横川小聖を呼び寄せ、祈禱をさせる。御息所の霊は鬼の形相となって現れ、打杖で小聖を追い返そうと激しく争うが、ついに法力に屈し、悪鬼の心を和らげて、再び姿を見せぬと誓い消え失せるのだった。数ある源氏物語を題材にした能の中でも、演出の工夫が突出しており、場面展開が多く飽きさせない。舞台正面に小袖を置き、病床の葵上に見立てる所なども、能独特の演出方法で、ある意味でこの曲の象徴とも言えるだろう。

次回公演の御案内

片山定期能7月公演  
令和7年7月27日(日)  
午前11時開演  
[午前10時30分開場]

能 「知 章」  
能 狂言 「鏡 男」  
能 「楊貴妃」  
能 「一角仙人」

片山 峻佑  
茂山千五郎  
分林 道治  
橋本 忠樹

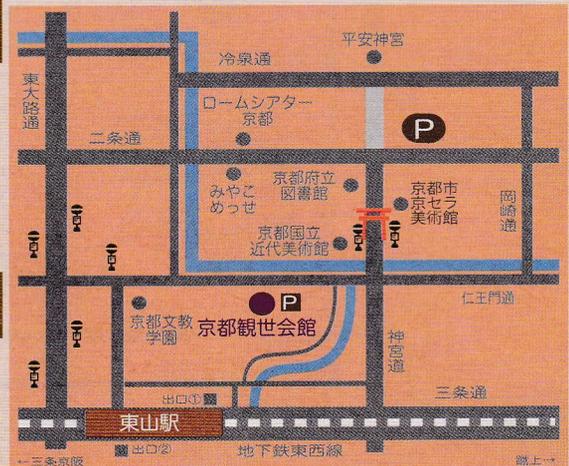
入場料

[全席自由]  
一般前売 4,000円  
一般当日 4,500円  
学生 2,000円  
回数券 17,000円  
(五枚綴)

チケット取扱所

京都観世会館  
075-771-6114  
9~17時 月休

片山定期能楽会事務局  
075-551-6535  
10~17時 土日休



会場/京都観世会館

京都市営地下鉄東西線「東山」駅下車 徒歩約7分

▽出演者等の変更がある場合は御了承くださいませ。  
▽見所内での写真撮影・録画・録音は固くお断り致します(指定業者を除く)。  
▽同じく見所内での携帯電話やスマートフォンは、必ず電源をお切り頂きますようお願い申し上げます。  
マナーモードも御遠慮くださいませ。

15:45頃 終了予定